



Title	雑報
Citation	北海道大学農経論叢, 16, 151-151
Issue Date	1960-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/10792">http://hdl.handle.net/2115/10792</a>
Type	bulletin (other)
File Information	16_p151-151.pdf



[Instructions for use](#)

## 編集後記

◎戦後この論叢を復刊してから、はや十五年の才月を経たが、その間論叢の出版体制も宇余曲折、昨年あたりからようやくその不安定性を脱却して、年に一度は必ず出せるようになった。体裁や表題などは若干変つたが、所謂やつと軌道に乗つたという所であつて、このことは私共にとつて誠に喜びにたえない所である。

顧りみれば、委員の微力のせいもあつたと思うが、それだけにまた研究の自由と本誌の伝統を守り抜くということは、いろんな意味で本当に苦しく、身にこたえた。しかし先輩各位をはじめ諸先生方は、その態度文字通りの叱咤勉勵をおしみなく与えてくれた。また大学当局の各位からも、深層に及ぶ理解と協力があつたため、私共も希望を捨てずに大いに頑張ることが出来た。ここに第十六集を刊行することが出来たのも、ひとえにこれ等の方々の御厚意のお蔭であつて、これなくして私共の役割は到底果し得なかつたと思う。ここに本集を公にするに当り、これ等の方々に對し衷心より謝意を表したい。

本集はとくに教室の若い研究者のために

開放された。集つた原稿は相変らずパラライテーに富んでいるが、これは本誌の特色とする所であつて、いずれも心血を注いだ労作のはづである。中には本誌への処女寄稿もあるが、それだけに執筆陣の顔ぶれも変つてきた訳である。当然のことながら、私共にとつて「発表」は学問研究の積極的基調である。発表のない研究は単なる勉強であつて、勉強は大学や研究所でなくとも出来るし、又やつている。発表こそは私共研究者にとつての生命であつて、このような意味から、本誌がひろく教室関係の若い研究者のためにも開放されたことは大いに喜ぶべきことであると思う。(金田弘夫)

◎本誌も本号で第一六号をかぞえる。学術誌としてけつして長命をほこることはできないであらうが、比較的少いスタッフの学問的情熱が、さまざまの困難をこえて、これを支えてきたのであることは明らかである。農学のなかで特殊な地歩をしめる学問分野として、ささやかなものであらうと、独自の機関誌をもちたい、もたねばならぬという信念は本誌の歴史を通じて一貫したものであつたし、またこれからももちづけられるべきである。

さいわい、過去に経験した困難も、諸氏の

御協力によつてだんだん緩和されている。少いスタッフにかわりはないが、それぞれの日頃の研さんの結果をかかなりの程度集録してゆくことは可能だといえそうである。諸学兄のすぐれた論稿をえて、名実あいともなつた学術誌として本誌をますます発展させたいものだと思う。

本号は、予期したわけではないが、比較的若手俊秀の論稿の集録となつたが、それぞれの視角からの問題意識とそれにせまらうとする真しな態度をうかがいうるであらう。寄稿された各位の御協力に感謝し、いっそうの御研さんを祈るものである。

刊行の時期をもう少しはやめたいと思つていたので、いろいろの都合でおくれたのはざんねんである。(足羽進三郎)

### 農経論叢 第16集

昭和三十五年二月十一日印刷  
昭和三十五年二月二十七日発行

編集者

足羽進三郎  
金田弘夫

札幌市北九西九

札幌市北七条西一丁目  
田武雄

印刷者 三陽印刷株式会社